

[外国語]

英語の音声に重点を置いたspeaking指導の工夫

—ICレコーダーを活用して伝わりやすい発話へ—

山本 優子*

1 はじめに

(1) 主題設定の理由

現行学習指導要領において、外国語は「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する指導の充実が求められている。

これを受けて、当校では各学年の指導計画やCAN-DOリストに「自己（他者）紹介スピーチ」や、「My Dreamスピーチ」、「Show and Tell」などを統合タスクとして位置付け、ALTを活用しながら計画的に指導してきた。

統合タスクの指導では、第一段階として生徒に原稿を書かせるために書き方の指導をていねいに行い、一人一人の原稿をALTと共にチェックした。第二段階として、発表の準備のために原稿を声に出して音読する練習に取り組みさせて、暗記をさせた。しかし、生徒の中には自分が書いた原稿が読めなかったり、読んだとしてもALTにうまく伝わらない発音であったりと、せっかく上手な原稿が書けても、本番のスピーチで上手に話すことができずに落ち込んでいる姿を目にして、「話すこと」の全体指導に限界を感じた。大岩（2014）は、実践の中でICレコーダーを活用して、音読やスピーチの個別指導に取り組み、大きな成果を上げた。¹⁾ この実践をヒントに、一人一人にていねいなspeaking指導をしたいと考え、本実践研究のテーマを設定した。

(2) 授業におけるspeaking指導について

日々の授業において、特に時間をかけて指導している活動の一つとして音読がある。音読の効用として、土屋は「コミュニケーションの『基礎的言語能力』をつくる」²⁾と述べており、生徒の自己表現であるspeaking活動へ発展させる可能性をもっていると考えられている。授業では、教科書の新出単語の発音練習および本文の内容理解を充分に行った後に音読を行う。音読指導ではリピートする機械的な音読だけでなく、様々な方法を用いて指導しているので、生徒は教科書本文の音読活動を楽しみながら熱心に取り組んでいる姿が見られる。しかしながら、注意ポイントをデジタルテキストで示しながら何度も練習しているにもかかわらず、音読発表では日本語のような発音であったり、文のイントネーションができなかったりしている生徒が多い。それは、これまでの音読活動が「本文の内容理解の後のまとめ」という位置付けであり、英語の音声の特徴を意識して英語らしく、相手に伝わりやすく話すよりも、聞き手意識のない状況で、英文を速く間違えずに読むことが生徒にとっての目的になっていたからであると考えられる。したがって、その発展的な活動として位置付けているスピーチでも、上述の通り聞き手（ALT）に伝わりにくい発話になっていたと考える。

スピーチとは、聞き手を意識した活動であり、聞き手に言いたいことを正しく伝えるためには英語特有の音声特徴の理解が必要不可欠となる。英語の音声面について、学習指導要領では「(3) 言語材料 ア 音声」において、(ア) 現代の標準的な発音 (イ) 語と語の連結による音変化 (ウ) 語、句、文における基本的な強勢 (エ) 文における基本的なイントネーション (オ) 文における基本的な区切り の5つの指導項目があげられている。³⁾

そこで、本研究では多くの生徒が英語の5つの音声特徴を理解して、聞き手に伝わりやすい発話ができるようにするために、speaking指導を充実させたいと考えた。そして、その指導においてはICレコーダーを活用した個別指導が有効であることを明らかにしたい。

*新潟市立赤塚中学校

2 研究の目的

本研究では、ICレコーダーを活用してspeakingの個別指導の充実を図ることを通して、生徒が英語の音声面の5つの特徴（発音、連結、強勢、イントネーション、区切り）を意識して、聞き手に伝わりやすい発話ができる生徒を育成することを目的とする。

3 研究の方法

平成22年10月に文部科学省は、ICTの活用について「教育の情報化に関する手引き」を作成した。中学校における生徒のICT活用【外国語における具体例】では、「英語「話すこと」 デジタルカメラ、ICレコーダーなどを活用して、英語で話した自分の音声を録音し、強勢、イントネーション、区切りなど、正しく発音できているかを振り返る。」⁴⁾とされている。speaking指導では、生徒一人一人の発話の見とりやその評価の難しさが問題点として挙げられる。本研究では生徒一人に1台ずつICレコーダーを貸与して、発話を記録させることで、これまで全体練習（指導）で取り組んできたspeaking活動を個別練習（指導）ができるようにした。

なお、ICレコーダーを活用することのメリットとしては次の7点が挙げられる。

- ①手本となるモデルの発話をあらかじめICレコーダーに録音しておくことで、何度も繰り返し聞いて英語の音声の特徴をつかむことができる。
- ②自分の声を録音することで、生徒は自分の発音や強勢、イントネーションなどをチェックできる。
- ③生徒同士で聞き合い相互チェックを行うことで、聞き手意識のあるspeaking練習ができる。
- ④イヤホンを使用することで、周囲を気にせず録音チェックやspeaking練習ができる。
- ⑤自分のペースに合わせてspeaking練習ができるので、得意な生徒はよりたくさん練習したり、苦手な生徒には教師が個別指導をしたりと、一人一人のspeaking練習量の確保と重点的な練習ができる。
- ⑥生徒が録音した内容を、授業後に教師やALTがチェックすることによって時間を有効に使うことができ、個別指導が必要な生徒を把握できる。
- ⑦タブレットやビデオなどでは生徒の視覚も刺激してしまうが、ICレコーダーを用いることで音声のみを集中して聞くことができる。

4 実践の概要

(1) 実践例 I

① 授業対象

対象：中学校 2年生 24名（男子12名，女子12名）

単元：Lesson 5 My Dream Mini-project NEW CROWN 2

② 単元と生徒の実態

Mini-projectでは、生徒が将来の夢についてALTに向けてスピーチをすることを最終ゴールとして設定した。生徒は、授業中の音読活動に熱心に取り組み教科書の短い英文はある程度暗唱して読むことができるが、ALTの授業で取り組むQ&A活動では、生徒の発話に「英語らしさ」が無く、ALTに自分の英語がなかなか伝わらない様子が見られた。教科書の本文を通してスパイラルに音声指導は行っていたが、生徒がそれらを定着できていないことは明らかであった。そこで、ある程度まとまったスピーチ発表の中で、5つの音声特徴を重点的に指導して、生徒がそれぞれの夢について聞き手意識をもってALTにも伝わるような英語で話す力を身に付けさせるために、以下のように単元を構成した。

表1 My Dream Mini-projectの単元構成

時	1・2	3・4	5	6・7	8	9
内容	・単元のゴールの確認 ・スピーチの書き方の理解・練習①	・スピーチを書く練習②・③ ・スピーチの書き方を基に自分の原稿を書く	・スピーチ原稿の推敲・相互評価	・英語の音声面の特徴を理解する ・ICレコーダーを用いた練習と相互評価	・スピーチの非言語面（表情等）を意識した練習	・ALTやクラスメイトに向けたスピーチ発表

③ 指導の実際

聞き手に伝わりやすいスピーチにするために、以下の3つの手立てを講じて、実践した。

ア 主活動につながるwarm upを行う

Q&A活動を帯活動として行い、聞き手に正しい情報を伝えるためには答えの中心（＝伝えたい情報）に強勢を置くことや、よりより発音で答えることが大切であることを意識させた。

イ モデルの比較を行う

スピーチでは、自分が伝えたいことを聞き手に正確に、伝わるように話すことが大切なポイントである。そのためには、発音やイントネーションなどの英語の音声の特徴を意識して話す力が必要となるが、生徒の実態から、その力は不十分であると分析できた。そこで、『スピーチをより英語らしく、伝わりやすいものにするためには音声面でどのような工夫をすればよいか』ということを考えさせるために、図1のような、モデルA（ALTによる良いモデル）、モデルB（JTEによる改善が必要なモデル）の2つのモデルをビデオに録画したものを見比べて、基本的な音声面の特徴についての気づきを促した。なお、ここで用いたモデル文は以下の通りであり、生徒に気付かせたい5つの音声特徴の具体例は、図2のモデル文中の5つのマークで示した通りである。

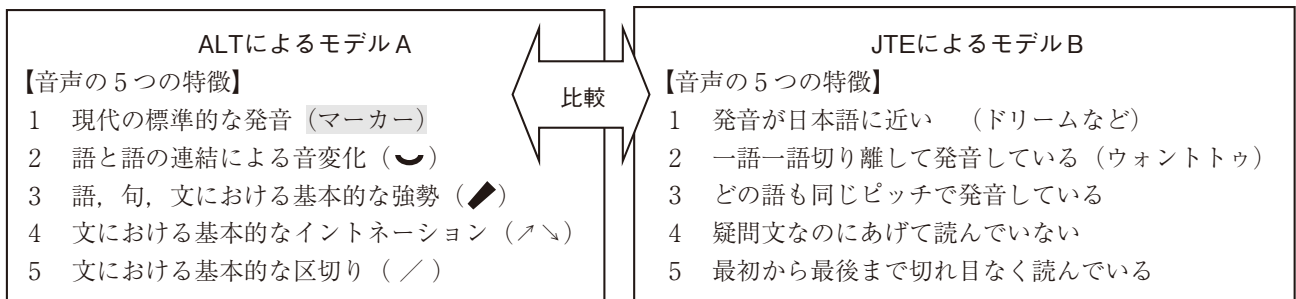


図1 ALTによるモデルA (Good) 及びJTEによるモデルB (Bad)

Hello, everyone. Do you have a dream? ↗ I'm going to tell you about my dream. I want to be a tennis player. I have two reasons.

First, I like tennis. Playing tennis / is very fun.

Second, I want to play tennis / with Kei Nishikori. He is very famous in the world.

In conclusion, many people can enjoy / watching ↗ and playing tennis. So I want to be a tennis player. I will do my best.

Thank you.

図2 分析で用いたモデル文

ウ ICレコーダーの活用

一人に1台ずつボイスレコーダーを貸与して、自分たちの音声を客観的に聞かせることにした。ICレコーダーには、前時にあらかじめモデルの分析をする前の生徒の発話（C 0）を録音した。モデル文の分析を経て5つの音声面の特徴を理解した後の発話（C last）を録音させて、変容を聞き比べさせた。その上で、5つの音声特徴を「伝わりやすいスピーチにするための観点」と定めて、ペアで相互チェックを行った。この活動を通して、生徒は自分のウイークポイントを知り、よりよいスピーチにするための改善点を確認して、目的をもって主体的にスピーチ練習をする姿が見られた。

④ 実践例Ⅰの結果

5つの音声特徴を意識して話すことで、より英語らしく伝わりやすいスピーチになるということを実感させることが一つの目的であったが、授業の振り返りで「自分の発話の変容に気付いた」と答えた生徒が9割であった。また、生徒の感想には「最初に録音していた英語と、今日の授業の後で録音した英語は、同じ文章なのにまったく違って、うまく話せていたのでよかった」という肯定的なものがいくつも見られた。

生徒はモデル文の分析・練習ののち、自分のスピーチで5つの発音の特徴をどのように活かせるかを考え、ICレコー

ダーを用いて練習を重ねた。その結果、この単元のゴールであるスピーチ発表においては、すべての生徒が自信に満ちた表情と、ALTに伝わる英語で表現豊かにスピーチ発表をした。評価者のALTからは、“The best speech I ever heard（今まで聞いた生徒のスピーチ発表の中で最も素晴らしいスピーチだった）”という感想をいただいた。このスピーチの評価平均は15点満点中13点と高評価であり、音声指導の成果が見られた。なお、C 0とC lastにおける5つの音声特徴の具体的な変容は表2の通りである。

表2 生徒の変容

音声の特徴	発音	イントネーション	連結	強勢	句切	全てクリア
クリアした生徒数 (22人中)	20人	20人	19人	10人	15人	8人

(2) 実践例Ⅱ

① 授業対象

対象：中学校 1年生 22名（男子10名，女子12名）

単元：Project ① 自己紹介をしよう NEW CROWN 1

② 単元と生徒の実態

このProject①では、生徒一人一人が自分の好きなものや人について、ALTにも伝わるように英語でShow & Tellをすることを最終ゴールとして設定した。この活動は、当校のCAN-DOリストでは「話すこと『発表』」の中で「メモを参照にしたり、絵を見せたりしながら人や物について40語程度で事前に原稿を準備した上で、Show & Tellができる。」と位置付けている。なお、単元の構成および手立てとしては実践例Ⅰと同様である。

中学校に入学した1年生にとっては、英語である程度まとまった原稿を書き、ALTに向けて発表する初めての経験である。教科書の本文もまだ短く、普段の音読活動では指導できない英語の音声特徴もあるため、この単元を通して「英語らしさ」を構成する5つの音声特徴を学ばせ、3年間を通して習得させるきっかけにしたいと考えた。そこで、1年時よりspeaking指導にも力を入れるために、1年生の全生徒（44人）に英語学習に対するアンケートを行った。その結果は以下のとおりである。

表3 英語の授業に対するアンケート

技能	好き・どちらかという好き	英語の音読で難しいこと（複数回答可）
「読むこと」	79%	・正しい発音をすること（26人）・語と語の音のつながり（11人）・文の上がり下がり（イントネーション）を意識すること（11人）・音の強弱、強勢（7人）・文のリズム（8人）・文の中の区切り（8人）
「書くこと」	63%	
「話すこと」	70%	
「聞くこと」	79%	

アンケート結果より「読むこと」や「聞くこと」などの受容技能において好きだと答えている生徒の割合が高い。反対に「話すこと」や「書くこと」などの発信技能はそれに比べて低いことが分かり、音読の難しさとして特に「発音」を挙げている。今回のprojectのShow & Tellにおいて、多くの生徒が「ALTの先生に向けて伝わりやすいスピーチを書いたり、話したりしたい」「英語の発音を上手にしてスピーチをしたい」などと目標を定めた。本実践では、生徒の手本となるモデルスピーチを十分聞かせる時間を確保し、練習した後で自分のスピーチを話すという活動の段階を踏み、5つの音声特徴を理解することで「上手に話せて、伝えられた」という実感を伴う成功体験をどの生徒にもさせたい。

③ 指導の実際

ア 日々の音読活動やALTとの活動の中で気づきを促す

少しずつ文構造が複雑になったり、一文が長くなったりしてくると、英語の音声特徴を意識しながら読む機会も増えてくる。例えば教科書本文に登場する“Look at this flower.”という文では、範読を何度も聞くことで、kとaの音が連結していることに生徒は気づく。その気づきの後に説明を加えて、音読を繰り返して練習して意識させるようにした。また、ALTとの授業では、Q&A活動を通して「伝えたい言葉を強く話せば伝わる」ということに気づいた。これらの活動を日々積み重ねて音声への関心を高めさせた。

イ ICレコーダーを活用したモデルの比較と分析～共同組立から自立組立へ～

実践例Ⅰにおけるモデル分析では、生徒の興味がビデオ映像に向いてしまい、音声への気づきに時間がかかったため、実践例Ⅱでは教科書の範読をモデルA（よいモデル）、音声作成ソフトで作ったスピーチをモデルB（改善が必要なモデル）として、音声のみを事前に一人一人のICレコーダーに録音をした。

第1段階では、全体で2つのモデルを聞いた後、個人作業の時間を与えた。生徒は集中してICレコーダーに録音されたモデル文を聞き、早い段階で2つのモデルの違いに気付くことができた。最初に挙げられた特徴としては「発音」、「区切り」であった。次に、授業で確認した「連結」と「強勢」に気付いた。イントネーションは「棒読みで、同じ調子で読んでいる」と生徒の言葉で表現することができた。

第2段階では、グループでモデル文の分析を行った。5つの音声特徴が、どのようにスピーチの中で活かされているのかについて、各グループ1台のICレコーダーを用いて話し合った。英語に苦手意識を持っている生徒も、グループで共同組立をすることを通して、協力しながら音声の特徴に気づき、伝え合う姿が見られた。

第3段階では、分析したモデル文を音声特徴に注意して読む活動を行った。授業冒頭にモデル文を録音させた（C0）のち、5つの音声特徴を復習してイヤホンをつけて、よいモデルを聞きながらspeaking練習を行った。

そして、ペアで相互チェックをしてアドバイスを伝え合い、練習を行った後に再度ICレコーダーに録音させた（C last）。授業の最後でC0とC lastを聞き比べさせたところ、44人全員が『上手くなっている』という実感を持ち、このprojectに不安を感じていた生徒にも自信が付き、前向きな感想を述べていた。生徒同志での具体的なアドバイスと、生徒の感想は以下の通りである。



図3 モデル文分析の様子



図4 共同組立の様子

<p>友達からのアドバイス いいね！ 発音が上手でスラスラ よめていてよかったです。</p>	<p>今日の振り返り ○英語らしいスピーチするための、5つの音声の特徴が分かった A(5~4) B(3~2) C ○5つの音声の特徴を意識してモデル文を読むことができた A B C</p>
<p>がんばれ！ i+atの所をそのまま言っている のでつけた所がいいと思います。</p>	<p>感想 これだけからちがう意見をもっていて、すごく大きくなりました。今日もらった ことを活かして、100点の点数を取ろうかなとできるようにがんばりたい</p>

図5 相互チェックでのアドバイスと生徒の感想

第4段階では、自立組立に取り組んだ。これまでの分析を参考にして、自分のスピーチに音声特徴をどのように活かせばよいかを考えて、原稿にマークを記入した。その分析に基づき、教師がICレコーダーに範読を録音して、個人練習→ペア練習（相互チェック）→最終の個人練習を行った。

この4つの段階をていねいに積み重ねて準備をすることで、どの生徒も本番の発表に自信をもって臨むことができた。



図6 自立組立の様子



図7 個人練習後の録音



図8 相互チェック



図9 Show & Tellの様子

4 成果と課題

(1) 成果

【実践例Ⅰ】

- ・生徒全員がB評価はクリア，8割の生徒がA評価を得られたこと。
- ・ICレコーダーの活用で，speaking指導における個の見取りが容易になり，個に合った指導ができたこと。
- ・モデルの比較やICレコーダーの音声の比較を通して，生徒自身が「分かった」「なるほど」「できた」という実感を伴う学びができたこと。
- ・生徒がそれぞれの課題に気付き，改善するために主体的に練習したりアドバイスし合ったりできたこと。

【実践例Ⅱ】

- ・ICレコーダーに教師の範読を録音したり，イヤホンを用いたりすることで，個人練習が充実したこと。
- ・1年生から音声特徴を学ぶことで，話す活動への抵抗感をもつ生徒が減ったこと。
- ・共同組立から自立組立の学習段階を踏むことで，英語が苦手な生徒も活動に取り組みやすくなったこと。
- ・生徒にループリック（評価表）を示し，評価基準と観点を共有したことで全員がA評価を得られたこと。

実践Ⅱの最後に，再度「話すこと」についてのアンケートをしたところ「英語が好き・どちらかというが好き」と回答した生徒は77%であり，短期間でspeakingに対する肯定的な意識が7%も増えた。変容した生徒の感想には「しっかり話せて達成感があった」「好きなものを英語で話せてよかった」「単語の細かい発音が分かった」「今まで意識していなかった5つの音声特徴が分かったし，ちゃんと話せてうれしかった」「緊張したけど自分を信じて自信をもてた」「話すことが楽しかった」「笑顔でできたし，英語の大切さが分かった」と，実感を伴うものが多く見られた。段階を踏んでいねいに指導をしたことで，speaking活動への生徒の自信がついたと考える。また，ICレコーダーの使用に対する感想は，全員が役立ったと回答した。具体的には，「先生のモデルと比べて自分のスピーチを直せた」「人からアドバイスをもらえてよかった」「自分のスピーチがうまくなっていくのが分かった」「発音を何度も確認したり練習したりできた」「自分の改善点や悪いところ気づくことができた」「客観的に自分のスピーチを聞いて発音などをチェックできた」という意見が多く，生徒のspeaking学習を手助けするために，ICレコーダーが有効なツールであったと言える。

(2) 課題

2つの実践例では，モデル分析～共同組立～自立組立の流れで単元構成を組んだ。ていねいに指導をすることで目指す生徒の姿（ゴール）にたどり着くことができるが，時間もかかる。どの単元で活動を組むかをCAN-DOリストに明記し，計画的に指導することが必要である。また，英語の音声特徴には様々なバリエーションがあり，ALTでも使い分けが難しい面があった。今後もスパイラルに授業に取り入れて，習得させていくことが大切である。

引用文献・参考文献

- 1) 大岩樹生「『5つの提言』を受けて，今やるべきこと(3) -ICTの効果的な活用～ボイスレコーダーを用いた実践～」TEACHING ENGLISH NOW VOL.27 SPRING 三省堂 2014年，16～18pp
- 2) 土屋澄男「英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導」2004年
- 3) 文部科学省「中学校学習指導要領」2008年
- 4) 文部科学省「教育の情報化に関する手引」2010年，58p